

MOUNT ZINE
13, 14 出品作

HOME SWEET HOME (ホーム・スイート・ホーム)

written and illustrated
by Miki Hiraoka

文章・イラスト 比良岡美紀

※このお話は MOUNT ZINE 12・13 に出品した
「In her shoe (イン・ハー・シュー)」の続編
(二年後のお話)です。

Special thanks:

小林東雲『プチすいぼく』(廣濟堂出版)

—

「あのね、話っていうのは——」

店員にブレンド、と告げたみゆきに、さっそく話を切り出す。

「ちよっと待って、お水くらい飲ませてよ」

「——ごめん」

みゆきは氷の入った水を勢いよく飲み干した。すぐに別の店員が注ぎにくる。

「のど、渴いてたんだ」

「ちよっとね。——で？」

「実はね——」

二週間前、上司から新規プロジェクトに入ってほしいと打診された。社運を賭けた新事業で、全国から人員が集まるそうだ。

「やったじゃん、おめでどう」

「……うん」

「うれしくないの？」

「大阪に行かなきゃいけないんだ。新事業は大阪で立ち上がるから」

「いいじゃない。新しい環境で仕事できるなんてうらやましい」

「でも……」

「旦那さんはなんて？」

「え？」

「旦那さんに話したんでしょ。なんだって？」

「それは……」

みゆきが険しい表情になる。

「話してないの？ どうして？ まず旦那さんと話すべきでしょう」

「そうなんだけどー」

「二年前も言ったよね。あなたが家出したとき。旦那さんと話しなさい、そうしたら上手くいくからって。それで戻ったんでしょ？」

私はうなずいた。

「いま聞いた話、一人で結論出せるようなことじゃないよね」

「だから、こうやってみゆきに」

「私じゃなく旦那さんに話すのよ。二人にとって大事なことでしょ
う。いたたまれずに目をそらす。」

「もしかしてこの二年、まともに話してないの？」

凶星だった。返す言葉がない。みゆきはため息をついた。

「そんなんじゃ、私みたいになっちゃうよ」

——え？

「いま、私みたいになっちゃうって……どういうこと？」

みゆきはまた水を勢いよく飲んだ。店員がブレンドコーヒーを運んでくる。テーブルに置こうとした瞬間、みゆきのグラスが店員の腕にぶつかった。

「ああ、ごめんなさい！」

みゆきはグラスを持ったまま立ち上がり、もう片方の手におしぼりを持って、テーブルを拭いた。「大変申し訳ありません。新しいものをお持ちします」

いいんです、とみゆきは言ったけれど、店員は平謝り。上司らしき人も出てきて、なんだか大ごとになったので、じゃあお願いします、と引き下がった。そして腰をおろすと、グラスをテーブルに置いた。

「どうしたの。なんかみゆきらしくない」

「ごめんね、ちょっと」

「どうしたのよ、話して」

みゆきの手を握り、まっすぐに目を見ると、みゆきはうつむき、深いため息をついた。

「実はいま、離婚調停中なんだ」

「——え？」

「仕事のパートナーとしては最高だけど、もう女として見られないって」

はは、と乾いた声で笑う。

「うすうす気づいてはいたの。ほかに女がいるって。でも仕事上はうまくいっていたし、本気になることはないと思ってた。私の勘もあてにならないね」

あの旦那さんが……信じられない。

「だからね、彩花。旦那さんとは、なんでも話し合わなきゃダメ。私みたいにならないで」

「うん……」

新しいブレンドコーヒーが運ばれてきた。もう話をする気分ではなくなっていた。みゆきも同じ気持ちなのか、無言でコーヒーを飲んでい。その様子を見ながら、五年前、二人が結婚したときのことを思い出していた。

結婚式には夫婦で出席した。結婚前からみゆきに話を聞いていたけれど、穏やかで優しそうなご主人で、常にみゆきのことを気づかっていた。仲のいい二人にすっかりあてられて、新婚時代を思い出したりもした。先輩として手本にならなきゃね、なんて言っていたのに。手本になるどころか面倒をかけてばかり。二年前も、みゆきは家出した私の相談に乗ってくれた。あのとき、旦那さんはすでに浮気してたのかな……。

「なんか、ごめんね。また今度ゆっくり聞かせて」
みゆきが伝票をつかむ。

「いいよ。私が誘ったんだし」

「今回はおごらせて。ね」

「うん、じゃあ……ごちそうさま」

店を出てみゆきと別れ、駅へ向かう。

それにしても衝撃だった。何か言わないといけなかったのかな……。

横断歩道で立ち止まる。夫の姿が見えた。向かいのレストランから出てきたのだ。

私がこの前、行きたいって言ったお店。下見してくれたのかな。横断歩道を渡り、夫のところへ急ぐ。と、女性が出てきて足を止めた。

きれいな、華のある人だった。続いて女の子も出てくる。二人とも親しげに夫に話しかけ、夫もうれしそう。六、七歳のかわいい子。フリルのワンピースを着ていた。

急にクラクションが鳴った。

「気をつけろ！」

びくっとして顔を上げると、トラックの運転手がものすごい形相でにらんでいる。ごめんなさい、とつぶやいて後ずさりをした。その拍子にバランスを崩し、座り込んでしまった。立ち上がろうとしたけど、めまいがする。疲れてるのかな。

「大丈夫ですか」

立ち上がり、声をかけてくれた女性に、大丈夫です、とお辞儀した。それから横断歩道を渡り、周囲を見回したけど、もう誰もいなかった。

見まちがいかもしれない。でも胸のあたりがざわざわして、そうではないと告げている。深呼吸をして、駅の改札に入った。

二年前、家出をしたのは、ひどいけんかをした翌日だった。

私は子供がほしかったから、不妊治療を始めたいと思っていたけど、夫はそんなもの必要ないと言っただけ。検査だけでもと何度もお願いして、ようやく行ってくれたのはうれしかったけど、特に問題ないと言われたのに、子供のことを真剣に考えてはくれなかった。

経済的には何も問題ない。義父が亡くなって夫は仕事を辞めたけど、子供のための資金はずっと私が貯めている。

そもそも子供を持つかどうか、きちんと話し合ったことはなかった。当然子供を持つのだと私は思っていたし、夫も同じだと思っていた。でも、本当は違うのかもしれない。だから、ちゃんと話そうと家に戻った。けれどこの二年、何も話せずにいる。

夫が私のことをどう思っているか——けんかして家出する妻にどんな感情を抱いているか——知りたいけど、怖くて聞けない。

改札を出た瞬間、冷たい風に両肩をすくめ、ストールを首に巻く。

さっきの女性、夫とずいぶん親しげだった。もしかして愛人だったりして。私が出たとき、あるいはその前から、関係が続いているとか……。だとしたら、あの子は夫の子？ まさか——。でも、もしそうなら、子供をほしがないことも説明がつく。つまり、もういるから……。

息が止まりそうになって立ち止まる。まさか。ありえない。必死に別のことを考える。

もしも新規事業に参加したら、猫は連れていけない。ただでさえ、猫は環境の変化を嫌う動物だ。

私が引き取る前、何度も違う環境に置かれたせいで、うちの猫は穏やかさを失ってしまった。ようやく本来の性格が戻ってきたところなのだ。

単身赴任するしかない。夫には猫の世話をしてもらわないと。でも私がいなくなったら、大っぴらにあの人と会えるようになるわけで、そうなったら、みゆきみたいに……。

「まだそうと決まったわけじゃない」

マンションのエントランスホールですれ違った人が、驚いたように私を見る。すみません、と小声で言っつて、急いでエレベーターに乗り込んだ。

でも、大阪でやっていけるかな。

挑戦したい気持ちはあるけど、土地勘もないし、知り合いもない。そんなところで、新しい仕事に取り組めるのかな……。

「ただいま」

帰宅するなり、猫を抱き上げた。猫は不思議そうに私を見ている。

「おかえり。みゆきさん元気だった？」

ドキッとした。猫に向かって、うん、元気だったよ、と返す。離婚のことは話せない。実はうちも、なんてなりかねないし。

「あのさ、話があるんだけど」

——うそでしょ？ 離婚のこと話してないのに？

「なに？」

声がうわずっている。それにドキドキしすぎて、口から心臓が飛び出しそう。

「猫を、譲ってくれないかと言われてるんだ」

「——え？」

猫？ 譲る？

「この前、チラシが入ってたろ。このマンション、ペット禁止になるって」

「うそ」

そんなの、いつ入ってたっけ。

「最近忙しかったもんな。ほら、これ」

猫をおろし、チラシを受け取る。たしかにペット禁止になると書いてあった。ペット同士のトラブルがあったらしい。

「うそ、来月から？」

「そうなんだよ。ちょっと愚痴ったら、じゃあうちで飼いますって言われてさ」

「誰に」

「前に病院で会った、川上さんという人。子供が猫を飼いたがってるんだって。うちの猫の写真を見せたら、すっかり気に入っちゃって」

そうだったんだ……。

「まず猫に会ってみて、そのあとお試しでひと晩預かりたいって」

「ふうん」

「それでさ、明日会いにいつでもいいかって聞かれたんだけど、どうかな」

「明日？」

そう言うてから、明日は休日出勤なんだと思い出した。

「ごめん、明日出勤なんだ。私がいなくてもよければ」

「わかった、聞いてみる」

夫はさっそく携帯電話で話しはじめた。私はまた猫を抱き上げ、じっと顔をのぞき込んだ。

「ごめんね、ここで飼えなくなっちゃうんだって」

猫は首をかしげている。状況をわかっているのだろうか。

「別の人が引き取ってくれるみたいだけど……お前、ちゃんと仲良くできる？」

猫はやはり不思議そうに、私を見ながら「にゃあ」と鳴いた。

二

「日曜出勤サイコー」

隣の席のはる香が叫ぶ。たしかに電車もすいていたし、電話もかかってこない。平日休んで休日働きたいね、と返した。

「そういえばさあ、小耳にはさんだんだけど」

はる香がいたずらっぽく笑う。

「なによ、ニヤニヤして気持ち悪い」

「まあ、余裕の発言ですこと」

「どういう意味」

「聞いたよ、大阪に行くんでしょ」

「えっ……」

「大抜擢じゃん？ 社運を賭けた新事業。いいなあ、彩花は」

しばらく考えさせてくださいと言ってから二週間。早く返事しなくちゃと思っていたけど、まさか、はる香に知られるとは。

「どうしたの？ 行くんでしょ？」

「いや、それが……」

「山口さん、ちよっと」

「あ、はい」

「話があるんだけど、いいかしら」

いいかしらと言いつつ、ダメと言わせない雰囲気は課長にはある。覚悟を決め、立ち上がった。はる香が両手の親指を立てている。がんばれと言いたいのだろう。あいまいに笑ってうなずくと、課長の席へ行った。

「例の件、結論は出たかしら」

「いえ、その……」

「続々とメンバーが集まってるの。顔合わせは来週よ。どうなの？」

決して声を荒げていないが、十分に迫力があつた。どう答えていいのかわからない。課長は私とパソコン画面を交互に見ていた。

「なにが問題なのかしら」

「問題、ですか」

「あなたが決断できないのは、気になってることがあるからでしょう。それはなに？」

「実は、猫が」

「猫？」

私はうなずいた。

「いま飼っている猫は、環境の変化にとっても弱いんです。猫はそもそも環境の変化に弱いんですけど、うちの猫は特別で。無理に連れていくと、どうなるかわからないので、その……」

「なら処分してはどうかしら」

「——え？」

「ああ、ごめんなさい。誰かに譲るとか、そういうことも考えてみたらどうかなくて」
処分……？

「とにかく、一週間以内に結論を出してちょうだい。いいわね」

一礼して課長の席をあとにする。違和感がぬぐえなかった。不信感といってもいい。猫を処分して、どうということ？ 猫よりも仕事が大事だって言いたいのか？

席に戻った私に、はる香は話しかけてこなかった。よつほど不機嫌な顔をしていたのだろう。ぬぐえない不信感を抱えたまま、とにかく早く仕事を終えたいと、それだけを考えていた。

「ただいま」

「おかえり、ご飯もうすぐできるから」

私は仕事用のバッグをソファーに置き、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「ちゃんと手を洗って」

「わかってるわよ」

ぐびりとやりたいところだったけど、食卓に置いて洗面台へ向かう。そういえば今朝ハンドソープが残り少なかったかも。そう思いながら蛇口をひねり、手を洗ってハンドソープを押すと、

「うわ、出た！」

「ああそれ、足しといたよ」

「もう、早く言ってよ」

「いつもなくなりそうなとき入れてるじゃん」

「そうだったっけ」

手首までハンドソープまみれになり、懸命に流す。タオルでふき取り、ようやく手洗い終了。食卓につくと、さっき出したはずのビールがない。

「ビールでしょ、ここだよ」

いつの間にか、夫がグラスに注いでいた。グラスで美味しく飲めるんだって、と夫から聞いたのはいつだったか……。それ以来ずっとグラスだけど、缶で飲むよりたしかに美味しい。

「ありがと。一緒に飲むの久しぶり」

お疲れ様、と夫がグラスを傾ける。私もグラスを傾け、一気に飲み干した。

「やっぱ旨いわあ」

「相変わらずいい飲みっぷりだね」

「そんなこと褒められても、ちっともうれしくない」

夫が笑う。私も楽しくなり、つまみの枝豆や、夫が用意した料理に手をつける。

どれも美味しかった。なんかしあわせかも——そう思ったとき、帰ってから猫を見ていないことに

気がついた。とたんに料理の味がしなくなる。

「ねえ……姿が見えないんだけど……猫、どこに行ったの」
また出ていったのだろうか。まさか、夫が処分……。

「ああ、川上さんのところ。お試しだよ」

何事もなかったように夫は言った。

「なんで？ 会いにきただけでしょう？ どうして勝手なことするのよ！」

「仕方ないだろう、預かりたいって言われたんだから。来月には飼えなくなるんだし、早いほうがいいじゃないか」

「なによその言いぐさ！」

立ち上がった瞬間ふらついて、しゃがみ込んでしまった。私、どうしちゃったの？

大丈夫か、彩花――。夫の声がする。薄れゆく意識のなかで、猫がひどい目にあっていませんよ
うにと、それだけを願っていた。

目が覚めると、白い天井があった。家じゃないと思ったけれど、どこなのかわからない。

「気がついた？」

田丸さんが、私の顔をのぞき込んでいる。

「田丸さん、どうして……」

「ご主人から電話もらったの。あなたが泡吹いて倒れたって聞いてびっくりしたわ」
泡吹いて倒れたって、なによそれ……。

「あわててたのよ。許してあげて」

ふっと肩の力が抜ける。田丸さんにはかなわない。うっとうしいときもあるけど、夫婦ともども、なにかとお世話になっている。感謝しなくては――。

「ご主人、もうすぐここへいらっしやるわ」

「本当ですか」

「あなたのこと、とても心配してたわよ。最近どうも様子が変わって」

そんな……。夫にまで見抜かれていたなんて――。

「二人でじっくり話してみたら」

私はうなずいた。やっぱりそうするしかないのだろう。

「猫ちゃんのことね」

「はい」

そう言ったあと、ふと思い出して聞いてみる。

「そういえば、うちのマンション、来月からペット禁止なんですよ。トラブルがあったんだそうですけど、何かご存じですか」

「知ってるわよ。それがねえ、本当にくだらないの」

「くだらない？」

話したいのを我慢していたのかと思うほど、田丸さんは生き生きと話してくれた。

きっかけは、大型犬が小型犬に噛みついたことだった。怒りのおさまらない小型犬の飼い主が、ペット飼育規約の見直しを提案したのだという。

「目的は大型犬の禁止だったはずなのに、小型犬以外禁止なんて言いだして、ほかの動物を飼ってる人が怒っちゃったのよ」

「猫とか、うち以外にもいますもんね」

「鳥だって魚だっているでしょう？ 魚なんて絶対外に出ないのに禁止はおかしいじゃない。公平公正を期すために、ペットがすべて禁止になったってわけ」

「え、それじゃあ、小型犬も飼えないってことですか」

「そうなのよ、それでまた揉めてるの。もうあのマンションはおしまいね」
おしまいって、そんな。

「あらごめんなさい、失礼なこと言っちゃって」

「いえ、別に」

失礼なのはいまに始まったことじゃないし、と思っていたら、女性の看護師が入ってきた。

「気がつかれましたね。顔色もだいぶ良くなられて。退院許可もおりると思いますが、念のため先生診察を」

うなずいて、渡された体温計を脇に挟む。出ていく看護師に、田丸さんが会釈をした。

「じゃあ、私も行くわね。何かあったらいつでも連絡して」

「ありがとうございます」

田丸さんを見送ると、疲れたのかあくびが出た。帰ったらゆっくり寝よう。きっと猫もいるだろうから。

四

医師からは過労とストレスだろうと言われた。

ストレスはたまっていたと思う。過労については、自覚はなかったけど、やらなければいけないことがあると誰でも無理をするので、気をつけるようにと言われた。でもすぐに続けて、「なかなか気をつけられないと思いますけど」と言われ、少し気が楽になった。そういう人たちをたくさん見てきたんだなと思ったし、みんな同じなんだと知って安心した。

だから会社へ電話したときも、課長に対し素直に謝ることができた。なかなか返事できなくてす

みません、と言ったあと、実は夫ときちんと話していないので、今週中には必ずお答えしますと伝えた。課長はしばらく無言で、電話が通じているのか心配になるほどだった。でも、大きく息を吐く音がして、課長の声があった。

「わかったわ」

「本当にすみません、今日も連絡なしに休んでしまっ

「昨日出てくれたんだし、今日は振休でいいわよ」

「ありがとうございます」

「ねえ、山口さん」

「はい？」

「旦那さんと、しっかり話をし

「はい……」

「ごめんなさいね、立ち入ったことを言

「ああ、いえ」

「実は私、夫と話し合わないまま仕事に打ち込んで、それで離婚したの」
突然の告白だった。バツイチなのは知ってたけど、仕事の原因だったなんて。

「だから、気になってはいたんだけど……この前聞いたとき、猫のことを言ったじゃない？ それで、なんだ猫なら、と思っってしまった。変なこと言っでごめんなさいね」
そうだったんだ――。

「いえ、いいんです。お待たせしてしまって申し訳ありませんが、よろしく願います」
明日も休んでいいのよ、と言われたけど、さすがにそれはと思い、明日体調が悪ければ連絡します、と言って公衆電話の受話器を置いた。

「山口彩花さん。山口さん」

「あっ、はい」

支払いをすませ、おつりと領収書を受け取って、長椅子に腰をおろす。座ったとたん、深いため息が出た。自分で思っていたより、疲れているのかもしれない。

「あの……お医者さんに聞いてきた。どう、大丈夫？」

「座って。そんなとこに立ってないで」

「うん……」

「ほら、早く」

夫はしばらく考えているようだったけど、ゆっくりと私のそばへ来て、隣に腰をおろした。

「あの、昨日はごめん。勝手に猫を預けたりして」

私は首を横に振った。

「私のほうこそごめんね。猫に会いにくるのと、預かるのは別の日だと思い込んでた。でも、マンションで飼えなくなるんだし、あなたが言ったように早いほうがいいと思う」

夫はホッとしたのか、笑みを見せた。

「それで？ お試しの結果どうだったの？」

「うん、それがね」

夫の話では、子供は飼う気になったのだけれど、母親が難色を示しているということだった。

「どうして？ 別にアレルギーとかじゃないんだよね」

「うん、違う。自分が世話することになるんじゃないかって、そう思ってるみたいなんだ」
「そうなの？ 子供がちゃんと世話するんだよね？」

「うん。様子見てきたけど、あの子ならちゃんと世話できるよ」

じゃあなんで……、と思った瞬間、問題は猫ではないのかも、と思った。私たちの問題が、猫ではないのと同じように。

「あのね、話したいことがあるの」

ドキドキしながら切り出す。夫はちよつと驚いた顔をして、でもすぐにうなずいた。

五

家に着いてから話すつもりだったけど、歩きながら話をはじめてしまった。最初は何から話したらいいかと思っていたのに、口をひらいたら、言いたいことがあふれてきて、言葉が追いつかないほどだった。

新規事業の件、夫は賛成してくれた。

「絶対にやるべきだよ。きみがずっとやりたかった分野じゃないか」

「そうなんだけど……私にできるかな」

「大丈夫だよ。きみならできる」

「本当に？」

夫はうなずいた。笑顔に嘘はないと思った。でも、突然フラッシュバックのように、夫と女性の姿がよみがえる。息が止まりそうになり、歩みを止めた。

「どうしたの、大丈夫」

夫が背中をさすろうと私の背後に回る。とっさに手で制し、すぐに後悔した。

「ごめんなさい……」

いいけど、と言った夫は少し不満そうで、先に立って歩いていく。うちのマンションはもう目と鼻の先だった。

夫が挑戦すべきと言ったのは、あの人と暮らすためかもしれない。そう思うと、素直に聞き入れられなかった。やっぱり、このままでは先に進めないのね……。

「あれ、どうしたんですか」

顔を上げ、また息が止まりそうになった。あの女性と、女の子が目の前にいた。

「すみません、娘がどうしてもときかないもので」

女の子は夫の手を取り、何かを渡しているようだった。

「これね、マリーちゃんが大好きだったの。マリーちゃんにあげてね」

「マリーちゃん？」

困惑する夫に、マリーちゃんが、と言いつづける女の子。マリーちゃんって、もしかして。

「ねえ、うちの猫のことじゃない？」

「え？」

夫が振り向く。

「ほら、デイズニーの白い猫。マリーちゃんっているよね」

「ああー」

夫は女の子の手を取り、ありがとう、渡しておくよ、と言った。女性も安心したのか、ありがとう

うございました、と頭を下げる。ふと、ひらめくものがあった。

「もしかして、うちの猫をひと晩預かってくださった……」

「奥様ですか、すみません、ご挨拶が遅くなりました」

「いえ、私のほうこそ不在にしておりますすみません。猫がお世話になりました」

「いいえ、せっかく預からせていただいたのに、かえってご迷惑をおかけすることになって……」

そうだった。飼えないと言われたのだった。それじゃあ、また最初からやり直し？

「ごめんごめん、駐車場探すのに手間取って」

男性がやってきた。——ということは、この人が。

「川上さん、ですか。山口の家内です」

「これはどうも、はじめまして。お会いできて光栄です」

ご主人には何かとお世話になってまして、と言うので、こちらこそ、主人がよくしていただいているようで、と返す。型どおりのやりとりを終え、会話がとぎれた瞬間、まるで音がすべて消えてしまったようだった。

「ねえお母さん、どうしても飼っちゃダメなのハッ和我に返る。」

「ダメよ、ちゃんと世話できないでしょう」

「できるよ、彩花、ちゃんと世話するもん」

——あやか？

「彩花ちゃんの様子を見させてもらいましたけど、大丈夫ですよ。ご心配のようなことにはならないと思います」

「でも……」

問題は猫ではないのかも、と思ったことを思い出す。

「あの、差し出がましいことを言って申し訳ありませんが」

全員が私を見た。緊張で口が乾く。でも——。

「彩花ちゃんに、任せてあげてもらえませんか。せっかく自分から飼う気になってるんですし」
そう言われても、と言ったきり、女性はうつむいてしまった。女の子は懇願するように母親を見上

げている。どうしよう、困らせるつもりじゃなかったのに……。

「彩花ができないときは、私がしよう」

「あなた……」

川上さんは、覚悟を決めたような表情で、大丈夫だよ、と奥さんの肩を抱く。

「ねえ、いいでしょお母さん」

女の子は母親の腕をゆすり、許可を得ようと必死だ。女性がふうと息を吐く。

「わかった、わかりました。もう、仕方ないわねえ」

「やったあ」

女の子が跳びあがって喜ぶ。夫が、もらったものを女の子に返した。

「じゃあこれ、きみがマリーちゃんにあげてね」

「うん！」

よかったー！。

「あ、猫……どうしますか。昨日の今日であれですけど、連れていきますか」

「そんな——行ったり来たりでまたおびえちゃうんじゃないの？」

「たぶん大丈夫。川上さんのお宅にもすぐ慣れて、ホントびっくりしたよ」

「そうなの？」

信じられなかった。でも最近は猫の世話も任せきりだったし、夫が言うならそうなのだろう。

なぜだか涙が出そうになり、あわてて上を向く。

「じゃあどうぞ、上がってください」

夫が先に立ち、そのあとに川上さん、そして奥さんと娘さんが続く。川上さんは二人をととも気づかっていた。夫の愛人かもなんて、疑ってごめんなさい……。

そして夫にも、心の中で謝罪する。あなたのこと、信じられなくてごめんなさい。できればもう一度、やり直したいの……。

猫は、引き取り手が見つかった。女性は愛人ではなかった。私は、どうする……？

エピローグ

「彩花、元気でね。いつでも東京に遊びにきてね」

「もう、はる香ったらそればかり！」

二人で顔を見合わせて笑う。こんな風に笑い合える同僚が、大阪でもできるかな。

「じゃあね、もう新幹線出ちゃうから」

「あつ、これお土産、大阪のみんなに。っていつでも全国から来てるんだよね。ああ、あとこれ、車内で食べて。彩花が気に入ってくれたお菓子。バージョニアアップしてるから！ あとね、あとね

——」

「もう無理だよ、乗るよ」

「わかった。じゃあ元気でね。成功を——」

はる香の言葉は最後まで聞き取れなかった。ゆっくりと新幹線が動きだし、はる香が追いかけるように走りだす。急に涙があふれてきた。

毎朝おはようって言うことはもうないんだとか、はる香のふくれつつら、けっこうかわいかつ

たなどか、歴代元カレの話が聞けなくてさみしいとか、いろんなことを考えた。

でも、また会える。いつかきつと。

はる香、私がんばるよ。成功を祈ってて——。両手で頬をぱんぱんと叩き、座席に戻った。

「うわ、すごい荷物」

夫が声を上げる。大阪まで持っていくのよ、と私は言って、はる香の手作りお菓子だけを出し、ほかの荷物を網棚へ納める。腰をおろし、本当に大阪へ行くんだなと思った。それも二人で。

あの日、川上さんに猫を引き渡したあと、夫に言われたのだ。

一緒に大阪へ行こう。僕がきみを支えるから、と——。

夫が自分の右手を私の左手に重ねる。その手をぎゅつと握った。今度こそやり直そう。しあわせな家庭を築こう。いまならきつとできる。心の中で、「愛してる」とつぶやいた。

おわり

最後まで読んでくださり、ありがとうございました!

またすぐにお会いできますように。

——比良岡美紀

Thank you for taking time and reading this
zine! I hope to see you again soon.

--Miki Hiraoka

